特集

戦後50年

シベリア抑留

住之江町三丁目　武田四郎さん

私の青春時代は、すべて戦争の歴史の中に閉じ込められている様な思いがします。

戦争に参加した私たちも大変な思いをしましたが、国策として満州に行かれた開拓団の人々の苦しみは私たちの苦しみの比ではなく、また、国内の戦時中の苦労は私どもの伺い知ることのできないところであります。

原爆が投下された広島、長崎など考えますと、前線も、銃後と称されていた国内の人たち、国民すべての人たちが悲惨な戦争の経験をしました。

特に私たちが戦場とした中国の人たちの辛酸は言いつくせぬ思いをさせたと、深く慚愧に耐えぬ思いをしております。

しみじみと戦争に対する罪悪感や、悲惨の深さを思い知らされています。

もっともっと悲惨な苦しみを負った方々が数多くおられますし、この内容は、戦争の悲惨さ、愚かさのごく一部であることをご理解ください。

昭和15年12月5日、軍用艦「いりえ丸」に乗船、函館幸桟橋を出航し、12月13日天津市塘沽港に上陸しました。

入隊は山東省・恵民というところで、通信部隊のなかの無線中隊でしたが、わたしたち素人も、しゃにむに、6カ月の間、無線通信教育がおこなわれ、前線に配置されました。

昭和16年12月8日太平洋戦争開戦を山東省でむかえることとなりましたが、中国戦線は、どんどん兵力が南方へ移され、中国軍特に中共軍の抵抗が熾烈になり、中国における制空権は全くなくなりました。

私たちの占領していた、河南省開封市にも直接、B25の爆撃が連日行なわれ、焼夷弾の雨を降らせる様になりました。

空襲下、泥の道、黄塵が吹き荒れる中、日に何十キロもの強行軍が続き、戦闘も熾烈を極め、戦死者も続出するような状態が続くようになりましたが、20年7月、私たちの師団は突然ソ連国境警備を命じられ吉林省白城子に着き、駐留。

久しぶりの平和な日があり、私たちの荒んだ生活を洗い流してくれるような思いでしたが、これもつかの間、8月9日、ソ連軍の爆撃により平穏な生活は、1カ月で吹っ飛んでしまいました。

いよいよ年貢の納め時と、言う思いを強くし、観念の臍を固め、どんな死に方ができるのか私自身深刻に考えて時を過ごしたことを思い出します。

今では「一人の死は地球より重し」と言われますが、あの当時は兵隊一人は1銭5厘と言われました。当時、はがきが1銭5厘だったので、招集令状一枚で兵隊がつくられるということです。

つまり、私たちの命が1銭5厘ということです。

戦争は、理性を麻痺させられ、目の前の相手を殺すことのみが、自分を生かす最善の途であり、祖国防衛の最高の方法であるかのように考えさせられていたのが、戦争の理論であったように思います。

「湾岸戦争」のおり、TV画像に映し出された映像がありますが、あのすさまじい砲弾の下、そこには多くの人たち、なんの武器も持たない女性やこどもたちが住んでいることを、又、立場を変えて考えていただきたいと思います。

やがて、8月15日、大安で終戦の放送を聞きましたが、聞き取れない中、どうやら戦争に負けた様だということが理解され、騒然とした有様になり、まだ戦うのだ！という者、家族持ちの招集兵は、一様に家族たちとの再開を夢見たことでしょうが、私は戦争に負けたというショックで、大きな打撃を受けておりまして、複雑な想いが胸中を去来いたしておりました。

スターリンがシベリア開発の労働力として、日本人捕虜を使用しようと考えていることなどしらず、「東京ダモイ」という甘い言葉にだまされ、貨物列車に乗せられ、アムール河の結氷を待って手製のそりに荷物を乗せ、ソ連兵に銃剣をつきつけられ、発砲されたりしながら、ブラゴベシチェンスクへたどり着きました。

金目の腕時計や万年筆などは略奪され、敗残の思いを深く味わされました。

この情景は今でも脳裏に焼きついています。

途中、海が見えるという声が上がり、一斉に歓声を上げたのですが、それはバイカル湖のほとりでした。シベリアの中心部奥深く運ばれたことを否応なしに知らされました。バイカル湖の水がしょっぱくなかったこと、かちんかちんに凍った黒パンの味が、絶望感を味あわせてくれました。

捕虜生活のはじまりです。

粗末なテントで作られた宿舎。零下30度での生活、労働。食料不足。栄養失調者の続出で死亡者の大半がこの時期に発生したと思います。

凍土はコンクリートよりも堅いように思われました。

焚火の木切れさえ見つけるのが困難なのです。

私たちは「生きる」ということの大切さを十分に味わされ、何としても生き抜いて祖国へ帰りたいと思うようになりました。

「鉄道建設」「露天建設」「水道工事」「煉瓦工」「建築工事」などいろいろな仕事がありましたが、ノルマは、ロシア人向けにできており、戦争に負けた無力感と、馴れていない私たちにとっては重労働でした。

米の代わりに昆布や大豆。どんなに煮ても昆布は米の代わりにならず、大豆が10粒程度入ったスープでは、腹の足しにはなりません。

春になって、野草が芽を出すとビタミン源の野草が手に入ります。私は「アカザ」を食べ、空腹感をいやしました。

「黒パン・アカザ・シラミ・南京虫・凍傷など」極寒と空腹の中での重労働、この苦しい思い出は終生忘れることは出来ません。

1949年（昭和24年）8月、私たちのグリシャ第6収容所は閉鎖され、帰国することになりました。

輸送船のタラップを夢のような気持ちで駆け上がったことを思い出します。

8月29日ナホトカ港出発、8月31日舞鶴着。

◎縦穴（炭鉱開発）

石油ランプの薄暗い光を頼りに、湧き出る水の中で土砂を掘り起こす。

地下12米の穴の底、周囲1米50程の穴の中は身を遮蔽する場所すらない。

巻いた！のかけ声で重い鉄バケツに詰め込まれた、水交じりの土砂が、左右の壁にぶつかりながら上る、ぶつかる度に容赦無く頭から降り注ぐ水と土砂、薄寒さにふるえながら、必死の巻き上げ作業が続いた。

武田四郎さん
- 大正9年、留萌市生まれ。
- 昭和24年、シベリアから帰留
- 昭和27年～29年　天売漁業協同組合
- 昭和29年～昭和63年　留萌信用金庫

ようやく10年目にして、夢に見た祖国への第一歩でした。

平成4年6月、43年ぶりで念願の墓参をすることができました。

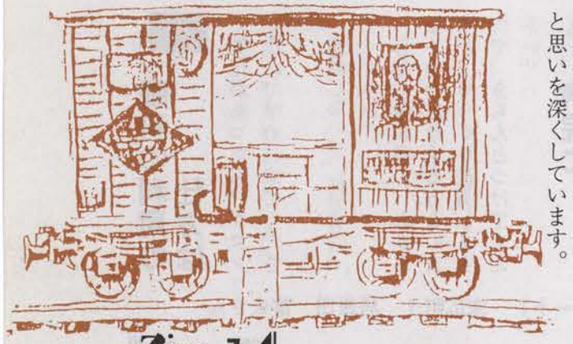
凍土の下、寂しい眠りの中で、故国を思い、望郷の思いに駆られていたであろうことを思うとき涙滂だたるものがあり、胸が張り裂けるおもいに駆られながら、無き戦友の名を呼びかけることで、精一杯でした。

これで私の戦争が終ったような気がいたしておりましたが、あの墓地の状況や死亡者名簿、埋葬地の確認等、残されたことがあまりにも多く、まだ終っていない。これを伝えていかなければならないと、改めて思いました。

私たちが、なぜ、あの中国奥深く攻め入ったのか、それが止むにやまれぬ正義の闘いであったのか、未だに理解ができずにおります。

戦争の大義名分は、そんなにアヤフヤなものであったとは思いたくないのですが、あの大義名分と、実際の戦闘行動との隔たりは、一人の人間としての立場から、どのように考えたらよいものなのか未だに理解が出来ません。

たくさんの亡くなった戦友たちの死は何であったのだろうか。

今、太平洋戦争が終って五〇年になろうとしていますが、私は今でも戦争の続きが行われ続けているように思えてなりません。

冷戦構造が解消されたと言われながらも、民族間、宗教間の闘いが絶えず、何やら人間の知恵の限界を感じさせられる思いでもありますが、今一度一人一人が自分のこととして、戦争という問題をとり上げ、2度と再び戦争の愚行を繰り返す事のないようにしたい。と思いを深くしています。